所報
IERS ACTIVITY REPORTS

2010年度 教育研究所 公開講演題目および講演者リスト
IERS Open Lecture Titles & Lecturers List AY2010

Date	Title	Lecturer/Speaker
May 21, 2010	Magnetic Resonance Imaging (MRI): An Excellent Tool for Researching the Structure and Function of the Human Brain	Dr. Hiroki Tanabe (National Institute for Physiological Sciences)
May 27, 2010	Intelligence and Achievement	Dr. Tamotsu Fujinaga (Professor Emeritus at Ochanomizu University, Former President at Japan Professional School of Education)
August 21, 22, 28 & 29, 2010	Learn from the Voices of Teachers/ Supporters in the Field: Current Education for Children from Abroad	Mr. Yasutaka Sekimoto (School teacher at a public night junior high school) Ms. Masako Deguchi (Staff member of NGO Musashino Network for Pinatubo Rehabilitation) Ms. Ikuko Ogawa (School teacher at a public junior high school) Mr. Tsuyoshi Kowata (School teacher at a public night high school)
October 5, 2010	Dr. David Murray: Superintendent of Education in the Empire of Japan 1873-1879	Dr. Benjamin Duke (Professor Emeritus at ICU)
October 23, 2010	**Literacy Seminary OB/OG Series** Advancing the Chiba Approach: For the Future of Africa	Ms. Saeri Muto (Former Advisor of Rwanda Department of Education, JICA TVET (Technical and Vocational Education and Training Support Project), JICA Expert)
November 20, 21, 27 & 28, 2010	DRA Workshops: Multilingual Education for Foreign Children in the School	Dr. Kazuko Nakajima (Professor Emeritus at University of Toronto)

リテラシー研究会
Literacy Seminary

I. 活動報告

2010年度のリテラシー研究会の活動について以下に報告する。今年度も前年度同様に研究例会開催，メーリングリストを通じた情報交換を行い，ホームページの研究会情報を更新した。また，初めてリテラシー研究会OB/OGシリーズを土曜日午後の時間帯で開催した。ほかにICUユネスコクラブと共催でドキュメンタリー映画「こんばんは」の上映会を行った。

1. 例会などの活動記録（2010.4～2011.3）

2010年度に開催した例会は以下のとおり７回である。発表スケジュール，発表資料はリテラシー研究会ホームページに掲載されている。

日時	タイトル	発表者
May 24, 2010	持続可能性に向けた教育：初等中等教育から高等教育まで	北原和夫（ICU Othmer記念科学教授，物理学）
June 14, 2010	教育の質的展開（Kaleidoscope of Educational Priorities in International and Regional Cooperation in Asia）	千葉杲弘（ICU教育研究所顧問）
Oct. 23, 2010（OB/OGシリーズ第1回）	チバタリアンが進む道 ～人にかけるアフリカの未来～	武藤小枝里（学部・院卒業生，JICA専門家）
Dec. 9, 2010	The Tricks of the Teacher: Private Tutoring in Cambodia as Teacher Corruption or Poverty Alleviation Strategy?	Walter Dawson（ICU准教授，比較教育）
Jan. 13, 2011	・カンボジアの持続可能な農業の取り組みと理科教育の役割 ・途上国における水道事業の民営化	中島実優（学部４年生） 折原涼太（学部４年生）
February 7, 2011	Improving Aid Effectiveness or Transforming the Global Capitalist System: What Should be Our Goal?	Dr. Mark Ginsburg (AED Education Director, Former Professor of Pittsburgh)
March 12, 2011（OB/OGシリーズ第2回）	現場力をつけるキャリアパス：国際協力遊牧民	敦賀和外（学部卒業生，大阪大学グローバルコラボレーションセンター）

2. 映画上映会

2010年12月14日にICUユネスコクラブ主催，リテラシー研究会共催でドキュメンタリー映画の上映を行った。タイトルは「こんばんは」（監督：森康行），中学校夜間学級で学ぶ生徒ー様々な理由で義務教育を修了していない10代の若者から孫のいる世代までの，国籍も多様な人々ーの日常を追い，夜間学級で学ぶことと識字の問題を考える内容のものである。

3. 卒業生，関係者の活動

2010年4月から2010年12月までの間に，リテラシー研究会のメーリングリストには，メンバーが関わる講演会や研究会開催案内に関する情報，政府からの政策発表に関する情報，教育政策に対する意見交換，海外赴任・帰国の情報，現地での活動から得られた知見・抱負，就職・退職，結婚などメンバーの近況報告が掲載された。

2010年度のメーリングリストから拾った卒業生の現在の活動先で海外のものは，ミャンマー，ラオス，カンボジア，コンゴ民主共和国，ガーナ，ニューヨーク，コソボなどである。

また，リテラシー研究会顧問千葉杲弘先生の活動は，アジア太平洋地域国際理解教育センター国際シンポジウム基調講演（ソウル），野村生涯教育センター主催第10回生涯教育国際フォーラム国際シンポジウムコーディネーター（パリ），公文教育研究会（日本，フランクフルト）参加，公文EIC主催「ドリームじいちゃんと行くインドネシア・スタディツアー」参加，「平和　共生　Conviviality：日本からの提言，対話の可能性」（『ICU－COE「平和　安全　共生」の理論と政策提言に向けて』第4章，2010）執筆，「世界寺子屋運動　識字活動から国際理解」（読売新聞論点2010年5月22日），「巻頭文　世界寺子屋運動20周年に寄せて」（日本ユネスコ協会連盟世界寺子屋運動２０周年記念『寺子屋がくれた未来』）寄稿などである。

II. 今後の活動計画と課題

2011年度は，従来の課題―ホームページを活性化し，情報の更新や有用な情報の提供を活発に行う―に取り組むほかに，現役生と卒業生，卒業生同士が交流し，切磋琢磨する機会として土曜日開催のOB/OGシリーズを3ヶ月に1回のペースで企画している。また，ICUユネスコクラブとの連携を図るためにメーリングリストを共有することや，リテラシー研究会OBの協力によるスタディーツアー（カンボジア，ガーナなど）および映画上映をユネスコクラブとリテラシー研究会で共催することなどが提案されている。

[リテラシー研究会HP]
http://subsite.icu.ac.jp/org/liteken/

鈴木　庸子
SUZUKI, Yoko

価値観研究プロジェクト

Value Study Project

2010年度には，「幸せを科学する－心理学からわかったこと」の著者である大石繁宏ヴァージニア大学心理学部准教授（ICU1993年度卒業生）をお迎えして価値観の学際的研究会を予定していたが，スケジュール調整ができず実行できなかった。

昨年報告したように，国際基督教大学では1960年代から学生や両親を対象に様々な価値観調査が行われてきた。その中の人生観の質問紙調査を2011年度は4月新入生対象に行う予定である。この質問紙はMorris(1956)が作成した「13の生き方」調査用紙（Table1）で，思想史上の主な宗教，および人生哲学の内容を分析し，価値の基本的要素として，（Ⅰ）ディオニソス要因：感受性が鋭敏で，解放的で，自分の欲求のままに行動しようとする傾向，（Ⅱ）プロメテウス要因：外界を支配し，変革しようとする活動的傾向，（Ⅲ）ブッダ要因：欲求を抑え自己統制をする傾向という三要素を考え，これらが異なる強さで組み合わされている価値志向の型（アポロ的，仏教的，キリスト教的，ディオニソス的，モハメッド的，プロメテウス的，マイトレーヤ的など）を仮説としてたて，作成されたものである。

Table 1 「13の生き方」要旨

生き方		要旨
L 1	（中庸）	人間が達成した最高のものの理解と保存，規律と叡智の人生
L 2	（達観）	人や物に依存せず，自己を原点とする内省・自足の人生
L 3	（慈愛）	他者への愛情と共感をもち，自己主張を抑制する人生
L 4	（享楽）	「生」への感覚的享楽と孤独の共存を尊ぶ人生
L 5	（協同）	集団活動への参加，他者との協調，積極的行動の人生
L 6	（努力）	停滞と安楽を嫌い，不断に変革を志向する人生
L 7	（多彩）	時と場合に柔軟に即応し，一つの生き方に偏らない人生
L 8	（安楽）	強烈な刺激を避け，平穏の中で快楽を追求する人生
L 9	（受容）	物事をあるがままに受け入れ，自然に逆らわない人生
L10	（克己）	衝動は抑え，克己と理想と自立の禁欲的人生
L11	（瞑想）	外界から離れ，瞑想し，内的生活の充実を図る人生
L12	（行動）	外面的な生活を尊重し，冒険的でエネルギッシュな人生
L13	（奉仕）	人のため，世のため，また宇宙目的へ献身する人生

1 年生（1960年代から2000年代）の人生観の変遷を概観すると以下のような結果であった。全調査者の13項目に対する評定（ 7 段階）得点をもとに項目間の相関マトリックスを求め主因子解を求めた後，プロマックス回転を施した結果はTable2のとおりである。

Table 2 「13の生き方」質問紙の因子構造（n=5272）

生き方		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	共通性
L13	（奉仕）	.62	-.02	.19	.03	.40
L 3	（慈愛）	.51	.10	.09	-.02	.28
L 1	（中庸）	.41	.06	-.08	.17	.22
L10	（克己）	.41	.10	.13	-.13	.21
L 4	（享楽）	-.39	.38	.16	.20	.34
L 2	（達観）	.01	.57	-.05	.02	.33
L11	（瞑想）	.13	.52	.02	.04	.31
L 9	（受容）	.07	.46	-.04	.34	.28
L 6	（努力）	.16	-.02	.57	-.06	.34
L12	（行動）	-.05	.04	.47	.10	.24
L 5	（協同）	.34	-.17	.45	.07	.32
L 8	（安楽）	.03	.18	.65	.65	.43
L 7	（多彩）	-.05	-.02	.41	.41	.18
平方和		1.30	1.04	.86	.81	
因子相関		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	
Ⅰ		1.00	-.05	.14	-.03	
Ⅱ			1.00	-.01	.22	
Ⅲ				1.00	.04	
Ⅳ					1.00	

因子を構成する項目の内容から，第Ⅰ因子を「慈愛奉仕」L13，L3，L1，L10，L4（逆転項目），第Ⅱ因子を「内面生活」L2，L11，L9，第Ⅲ因子を「積極行動」L9，L6，L12，第Ⅳ因子を「安楽多彩」L8，L7と名づけた。4因子を基に主要項目を加算し平均した価値志向得点を算出した。各時代における男子学生と女子学生の価値志向得点の平均値と標準偏差はTable3のとおりである。

Table 3 各時代における男子学生と女子学生の平均価値志向得点

因子	性別	60年代		90年代		2000年代	
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
慈愛奉仕	男子学生	4.74	0.86	4.40	1.03	4.30	0.95
	女子学生	4.86	0.80	4.32	0.96	4.06	0.83
内面生活	男子学生	3.19	0.84	3.26	0.98	3.56	0.98
	女子学生	3.10	0.77	3.15	0.87	3.42	0.83
積極行動	男子学生	4.16	0.90	4.11	1.11	4.06	1.04
	女子学生	4.06	0.88	4.03	1.05	3.97	0.86
安楽多彩	男子学生	4.62	1.06	5.19	1.14	5.06	1.19
	女子学生	4.69	1.10	5.58	0.92	5.22	0.92

また，各年代の男女の平均値を図示するFigure 1 ～ Figure 4 となる。

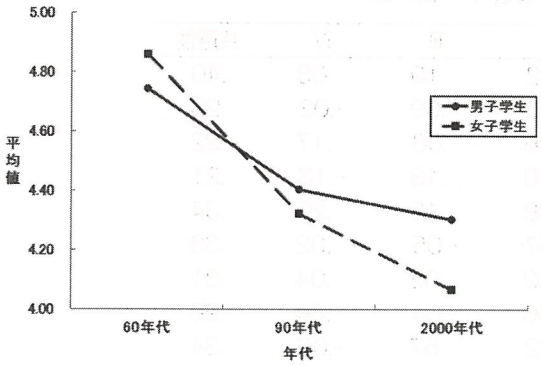

Figure1 各年代における男子学生と女子学生の「慈愛奉仕」得点

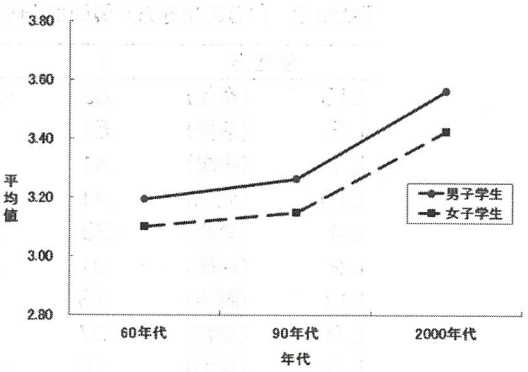

Figure2 各年代における男子学生と女子学生の「内面生活」得点

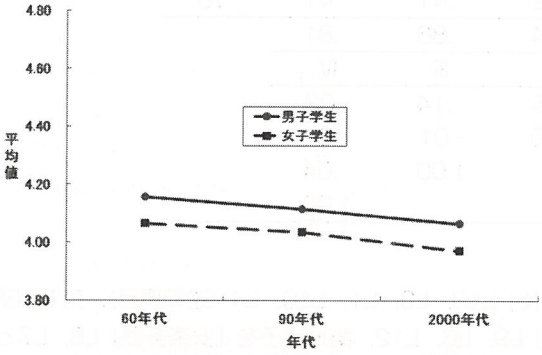

Figure3 各年代における男子学生と女子学生の「積極行動」得点

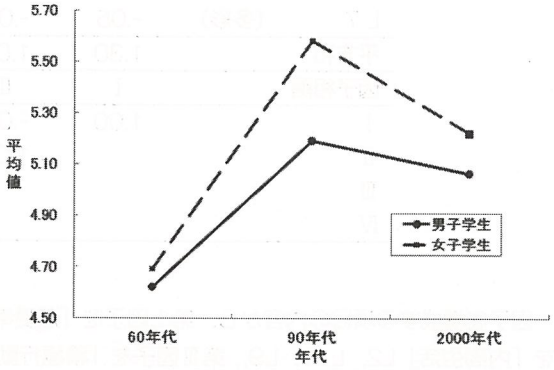

Figure4 各年代における男子学生と女子学生の「安楽多彩」得点

年代比較によって捉えられた特徴は，国際基督教大学の主義でもある他者に奉仕するキリスト教的価値志向「慈愛奉仕」は時代とともに好まれなくなってきた。その傾向は女子学生に顕著である。内面的精神生活を重要視し現実から逃避する価値志向「内面生活」は，今までの研究で性差は見られたが年代差は見られなかった。しかし，2000年代の入学生は男女とも60年代，および90年代より得点が高いという特徴があった。仲間と協同して積極的行動をする価値志向「積極行動」は性差が見られ男子学生が高かった。安楽を求め柔軟で多元的生き方をを好む傾向「安楽多彩」は，60年代から90年代まで年代とともに著しく上昇していたが，2000年代において女子学生は急激に低下していた。一方，男子学生は女子学生ほどの変化はなかった。

時代環境や大学のシステムが大きく変化してきた2010年代の国際基督教大学入学生の人生観の様相はどのように変化するのであろうか。50年間にわたる大学生の人生観の定点観測，さらには大学4年間の縦断的調査が，国際基督教大学の教育を考えるときの貴重な資料になることを願っている。

大井　直子
OOI, Naoko